

# タイ国ヤソートーン県ワット・マハータート所蔵 貝葉写本について

## ——「タム文字写本文化圏」の事例

The Palm-Leaf Manuscripts Kept at Wat Mahathat, Yasothon Province, Thailand

飯島明子 IIJIMA Akiko

(天理大学国際文化学部・助教授)

### はじめに

タイ北部では1970年代からチェンマイ大学のスタッフによって精力的な調査が行われた結果、村々の寺院が所蔵してきた膨大な量の貝葉写本の存在が明らかにされ、マイクロフィルムによる保存も着実に進められてきた<sup>1</sup>。該地域の貝葉写本の大部分はタム文字<sup>2</sup>と通称される文字で書かれているが、同様のタム文字を用いた貝葉や紙製写本が、タイ北部のみならず、ラオスの低地部からタイ東北部、ビルマ・シャン州の一部、中国・雲南省最南部（西双版纳）にも分布し、それらの地域を通じて、「タム文字写本文化圏」<sup>3</sup>と呼びうるような、共通の文字に媒介された写本文化の同質性が観察される。

タイ北部から始まった「タム文字写本文化圏」における写本調査は、その後他の地域でも様々な形で行われている<sup>4</sup>。特にラオスでは、1980年代後半から情報文化省が管轄する本格的な調査・保存プロジェクトが実施され、多大な成果を蓄積しつつある。まず1988年3月にラオスの貝葉に関する初の全国的なセミナー<sup>5</sup>がウィエンチャンで開催されたのに続いて、ウィエンチャン、ルアンパバーン、サワンナケート等6県の250寺院が所蔵する貝葉写本のインヴェントリーを作成するプロジェクトが、チェンマイ大学の調査を一貫して牽引してきたソンマーイ・プレームチット氏の指導の下に開始された（1988-1994）。1992年にはドイツ政府が助成する「ラーオ写本保存プログラム（Preservation of Lao Manuscripts Programme）」が組織され、その後10年間にわたるプロジェクトを通じて、ラオス全土17県830寺院（ラオスに在る全寺院の約30%にあたる）の踏査が行われ、368,000束（ブークphuk）に及ぶ貝葉写本データがプールされ、選ばれた写本が930巻（各巻30米）のマイクロフィルムに収められた。これらの成果はすべて、同プロジェクトの最終年度の2002年にラオス国立図書館に移管され、今後情報文化省の規定に従って内外の研究者の用に供される運びとなっている。又、ルアンパバーン、ウィエンチャン、サワンナケート、パクセーに写本保



メコン河中流域を中心としたラーオ人の居住地域【飯島2001b: 113】

存センターが設けられ、「ラーオ写本保存プログラム」の枠組みに沿った保存活動が今後も継続される予定である<sup>6</sup>。

メコン河を挟んでラオスと隣接するタイ国東北部の広範な地域は、1893年にメコン河が兩岸の地を分かつ国境となって分離されるまで、ラオス地域と連続したラーオ人の生活圏であった<sup>7</sup>。タイ東北部に残る貝葉写本の多くは、タム文字のヴァリエーションの中でもラオス地域と全く同一の文字（タム・ラーオと呼ばれることがある）で刻された、言わば「ラーオ写本」である。しかし上述のラオスにおける貝葉調査の進展に比して、東北タイの貝葉に関しては1980年代にほぼ全域での予備調査が行われただけで<sup>8</sup>、未だに本格的な調査の対象とはなっていない。本稿で紹介する、ヤソートーン県ヤソートーン市のワット・マハータート所蔵貝葉写本の調査は、そのような欠を些かなりとも補うことをも意図して、筆者が中心になって行ってきたものである。とりわけ、同寺が所蔵する大量の貝葉写本について、19世紀前半にウィエンチャンから招来されたという伝承が地元伝わることが、ラオス地域の貝葉と併せて研究されるべき「ラーオ写本」として、筆者の興味を強く惹いたことを予め指摘しておきたい。

ワット・マハータート所蔵貝葉写本の筆者による第1次調査は、1997年8月から1998年10月にかけて、マハーサーラカム大学イサーン芸術文化センターのスタッフの協力を得て行った<sup>9</sup>。この調査により、同寺の経庫（ホー・トライ ho trai 写真1）に約2,700巻（マット mat）の貝葉写本が収蔵されていることが確認された。その後カタログ作成作業が遅延する間に第1次調査の不備が認められたため、再調査の実施を決定し、本年より第2次調査を開始して、現在なお調査継続中である。したがって本稿は、中間報告として、第1次調査で得られた暫定的データの一部を紹介す

るに留まらざるを得ないが、それらのデータを通じて、ワット・マハータート所蔵貝葉写本が示唆する「ラーオ写本」研究の今後の拡がりの可能性を展望したい。

## 1. ヤソートーン略史

ラーオ人のコーラート高原すなわち今日の東北タイ地域への進出は、既にラーンサーン王国<sup>10</sup>時代の初期から始まっていたと推測されるが、ラーオ人の住地は主としてメコン河沿岸地帯に留まり、東北タイ地域の「ラーオ化」<sup>11</sup>はアヌ戦争<sup>12</sup>終結後によりやく本格化する<sup>13</sup>。しかし18世紀初頭のラーンサーン王国の分裂が多くのラーオ人の南方移住の契機となり、より内陸部への進出を促したことも確かであろう。少なくともヤソートーンの歴史は、この時期のラーオ人の移動に端を発する。

19世紀末に編纂された「ヤソートーン年代記 (Phongsawadan Muang Yasothon)」<sup>14</sup>がさらに過去の記録に拠って伝えるところによれば、「ムアン・ヤソートーンを創建した王の家系には、チャンタブリー都 [=ウィエンチャンの都] 県のノーンブアルムプー [=ノーンブアランプー] 村に居を置いたプラター・プラウオー (Phra Ta Phra Wo) と言う名の父祖がいた」とされる。プラター・プラウオーの名は数多の伝説のベールに包まれている<sup>15</sup>。しかしおそらく、彼らは始めウィエンチャン王シリブンニャサーン (Siribunnyasan c.1751-1779) に仕える官僚であった者たちで、後に王の不興を買い、王都ウィエンチャンから逃れてメコン河を渡り、ノーンブアランプーに割拠した。

以来ノーンブアランプーとウィエンチャンとの間は、断続的な戦闘状態に陥った。「ヤソートーン年代記」に拠れば、プラターが戦闘で命を落とした後、残ったプラター・プラウオーの一族はチャンパーサックへ向かって逃れ、一部は途中でドン・シンコーク・シンター (Dong Sing Khok Sing Tha: シンターは後のヤソートーンに位置する) に落ち着いた。一族に対するウィエンチャン王の脅迫はなおも続いたため、彼らはチャンパーサック王の支援を求めたが、チャンパーサック王はそれに十分応じなかった。そこで一族が頼ったのは、トンブリーに都を開いて間もないシャムのタークシン王だった。タークシンはチャクリー将軍 (後のバンコク朝1世王) 率いる軍隊をラーオ地域に派遣した。シャム軍は1778年にウィエンチャンを陥れ、ウィエンチャンとチャンパーサックはシャムの朝貢国となる。プラターはシャム軍のチャンパーサック地域到着以前に死亡したが、シンター村に移ったプラター・プラウオー一族は、1781年にシャム軍のカンボジア地域遠征に参加するなど、シャムとの連携を強めていった。さらに一族は1791年、チャンパーサック王サイニャクマーンの死に乗じてチャンパーサックを襲ったスィアンケーオの討伐に貢献し、平定後にシンター村の首長であったターオナーがバンコク朝1世王からチャンパーサック国主に任じられた。そして1812年<sup>16</sup>、シンター村はヤソートーンの名で、シャム王からブラストーンラーチャウォンサー (Phrasunthonratchawongsa) の欽賜名を賦与された国主が治めるムアン (muang クニ) の地位に格上げされた。斯くしてヤソートーンは、ウィエンチャンに出自を有する一族によって開かれたが、シャムに従属することを選択した結果、見返りとしてチャンパーサック王国の旧域にも勢力を及ぼしつつ、その地位を確立したのである<sup>17</sup>。

1827年に始まるアヌ戦争の間、初期段階にヤソートーン住民の一部がウィエンチャンの副王チャオ・ティッサ<sup>18</sup>の指揮するラーオ軍によってウィエンチャンへ移送されたが、国主ら支配層はアヌ王側に加担することなく、バンコクへの忠誠を守り通した。

ムアン・ヤソートーンは19世紀末に国主が廃されて、バンコク政府派遣官吏による統治に移行する（註10を参照）まで、5代にわたる国主プラスントーンラーチャウォンサーが治めた<sup>19</sup>。中で注目すべきは第3代国主ファーイの事績である。アヌ戦争後、ウィエンチャン王権の途絶による混乱がとりわけメコン河左岸地域で続くなか、ファーイは左岸地域住民に右岸への移住を促し、新ムアンの建設に尽力した。この功績がバンコク朝3世王に認められて、ファーイは一時期、ナコーンパノム国主を兼任した。

## 2. ワット・マハータートと同寺の経庫

伝承によれば、プラター・プラウォー一族が初めてスィンターに居を定めた時、周辺の大きな森の中に廃寺の跡と仏像を見出したと言う。彼らは仏像の在った場所に寺院を建設し、ノーンブアランプーから従って来たであろう僧侶たちをそこに住まわせた<sup>20</sup>。この伝承は、人々の仏教への篤信を物語る。

ワット・マハータート（「大仏舍利寺」の意）の基礎を築いたのは、チャンパーサック国主となったターオナー（在位1791-1811）であるとされる。プラター・プラアーノン（Phra That Phra Anon）の名で知られる仏舍利に関しては、二人のウィエンチャン住民がインドから招来したという伝承がある。二人はウィエンチャンに仏舍利を納める塔を建てようとしたが、反対に遭って放浪の末、現在のヤソートーンの地を当時支配していたクメール人の首長に助けられて、仏舍利塔を建立した<sup>21</sup>。そしてターオナーの時代に布薩堂と僧房が設けられたと言うが、それらの建物は今日残存しない。

問題の経庫は、後の1830年頃、第3代国主ファーイの時代に建立された。しかしその経緯をめぐっては、二つの異なる伝承が存在する。

第一の伝承は、バンコク朝と関係づけられている。それによれば、アヌ戦争中、バンコクから派遣された討伐軍が基地としたヤソートーンから出陣する際、ワット・マハータートの住職プラマハーラーチャクルー・ラッカム・ク（Phra Maha Ratchakhru Lak Kham Ku）が出陣式を執り行った。その結果バンコク軍に勝利がもたらされたとの報をバンコク朝3世王が慶び、ヤソートーンに三蔵を下賜されたと言う。そこで国主、住職、その他の人々が協力して経庫を建てた<sup>22</sup>。

第二の伝承は、ウィエンチャンに由来する。それによれば、前記住職の前任者であるプラクルー・ラッカム・オンフークウェーン（Phrakhru Lak Kham Ong Hu-kwaeng）がウィエンチャンへ仏法修行に赴き、長老位を得て帰郷する際、ウィエンチャンのサンガ長に三蔵を請うて与えられ、舟でメコン河からムーン河を経て運んで来た。三ヶ月の旅の末に三蔵を携えた僧侶が到着すると、国主を始め役人たちは大いに歓迎し、彼らがこぞって三蔵を納める経庫を建立した<sup>23</sup>。

これら二つの伝承の信憑性については、後段で検討を加える。

### 3. ワット・マハータート所蔵貝葉写本の概容

ワット・マハータートの経庫に収蔵された写本はすべて、タム・ラーオ文字で貝葉に刻された、「ラーオ写本」である。言語については、一見したところ殆どがパーリ語文献であるが〔APPENDIX Bを参照〕、ラーオ語が挿入もしくは混用されるスタイルが採られている場合も少なくないので、個々の写本にあたって調べる必要がある。写本の束（phuk）、あるいは巻（mat）の末尾などに、写字生（僧侶・沙弥、もしくは僧侶・沙弥であった後に還俗した人々である）が自筆の文章を付記している場合、それらは主としてラーオ語で書かれている。そうした文章は写本のタイトルや書写年代の情報を含むことが多く、言わば「コロフォン（colophon）」<sup>24</sup>の役割を果たす。以下に示すデータは、概ねコロフォンから得られる情報に基づいている。

既述のように、現在ワット・マハータートの経庫には約2,700巻の貝葉写本が収蔵されている。内1,002巻は8段から成る棚に置かれ〔写真2〕、1,694巻は全部で9棹の経箱や戸棚に収められていた。棚上の貝葉の殆どは前後に木（「マイ・パカップ mai pakhap」と呼ぶ）をあてがわれ、絹布で包まれた状態で置かれており〔写真3〕、完本が多いと見られたが、経箱や戸棚の中のものは貝葉に空けた穴に通された紐（「サーイ・サノーン sai sanong」と呼ぶ）が切れたりはずれたりして、バラバラになった断簡が多かった。従って、以下では棚上の貝葉のみを扱う。

各段（下段からⅠ～Ⅷとする）の内訳は次の通りである。第Ⅰ段全150点のタイトルをAPPENDIX Bに示した。

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
150	127	161	113	109	130	114	98

約半数にあたる、第Ⅰ段から第Ⅳ段に収蔵された551点の貝葉のうち、コロフォンから書写年代の知られるもの207点をリストアップしたのが、APPENDIX Aである（第3コラムに何段目に在るかを示す）。第5コラムに記した年代の信頼性については精粗があり、小暦（又は仏暦）で記された年数と、60年周期（又は12年周期）の年名が整合性を有する場合を信頼性が高いと見て<sup>25</sup>、下線を付してある。これによれば、信頼しうる最も古い書写年代は1569年（No. 58）であり、最も新しいのは1888年（No. 116）となり、300年以上にわたる写本が同一の場所に保管されていること、そしてその一部はヤソートーンの創建時をはるかに遡る以前に制作されたものであることがわかる。

### 4. 写本制作のスポンサー

APPENDIX Aの第2コラムは、コロフォンに現れる写本制作のスポンサーの名称（一部に、写字生と思われる名も含んでいるので、再調査で確認する予定である）である。第Ⅰ段から始めて第Ⅳ段まで、登場する順に名前に番号を振って並べた。これにより、計120名以上の異なったスポンサーの名称が知られる。

大勢のスポンサーの内、3人の人物が目立って、10点以上の写本制作に関与している。すなわち、ウパラパンニャー（Upalapannya 2-1~16）、プラスントーンラーチャウオンサー



(Phrasunthonratchawongsa 11-1~30)、スィーハタヌラーサーティパティ (Sihatanurasathipati 21-1~11) の3人である。

プラスントーンラーチャウオンサーは言うまでもなくヤソートーン国主であるが、年代の分布から見て、概ね第3代国主ファイーその人であろう。

スィーハタヌラーサーティパティはウィエンチャン王チャオ・アヌの数多くの御名の一つとして、年代記や刻文に現れる名とほぼ一致する<sup>26</sup>。この人物がスポンサーとなった11点の写本の年代は1804年（チャオ・アヌの登位の年）から1826年（アヌ戦争開始の前年）にわたり、すべてアヌ王の治世中にあたるから、この人物をアヌ王とみなして間違いないだろう。

ウパラパンニャーの名はサンカラーサー（サンガ長）ないしラーサクルーの称号と共に現れ、関与した写本の年代は1804年から1824年に及び、スィーハタヌラーサーティパティの場合と同様、すべてアヌ王の治世にあたる。アヌ王時代のサンガの代表者であった考えられる。

APPENDIX Aのアイテムを年代順に並べ直してみると、72点がアヌ王の治世中に制作されている。先述のようにワット・マハータートの経庫が1830年頃に建立されたのであれば、アヌ王時代の72点とそれ以前の69点は、ウィエンチャンで制作されたと考えるのが妥当であろう。これはAPPENDIX A 収載写本の約70%がウィエンチャンから運ばれて来たことを意味する。ウィエンチャンでは、アヌ王時代に王とサンカラーサーが中心となって最も活発な写本制作が行われた模様である。

1827年（No. 113：これがウィエンチャンで制作された最後の写本と思われる）から14年間にわたる空白期間があり、1841年（No. 11-7）から再び写本制作が開始されている。この第二期の写本制作は、第3代ヤソートーン国主ファイーによって担われており、ヤソートーン周辺で行われたものだろう。別にヤソートーン＝ナコンパノム国主の名で登載された8点（No. 32）も加えて、第3代国主がワット・マハータート所蔵貝葉写本の歴史を通じて最大のスポンサーとなっている。

## 5. 歴史の中の貝葉写本

先述のように、ワット・マハータート所蔵貝葉写本の最初のコアであり、経庫建設のきっかけとなった三蔵の由来については、二つの異なる伝承がある。一方はバンコク朝3世王に帰し、他方はウィエンチャンから招来されたというものだ。前節で試みたスポンサーの分析から、経庫が建設された1830年頃以前の古写本はウィエンチャンで制作されたことがほぼ明らかであるので、前者の伝承は事実と異なり、後代に創作されたと考えられる。それはメコン河右岸地域が東北タイ（イサーン）として近代タイ国家の一地方となる過程で、ラオス地域との歴史的関係を清算し、バンコクと直結する新たな物語として登場したものであろう。

16世紀半ばから19世紀始めに及んで、ウィエンチャン地域で制作されたと推定されるワット・マハータート所蔵貝葉写本は、まずラーンサーン史の史料としての価値を有する。女性を含む弱小のスポンサーたちの同定が進めば、ウィエンチャン王国の社会を構成した各層の様態が浮かび上がるであろう。

ワット・マハータート所蔵貝葉写本を利用する研究として、もう一つの有望な分野は、パリー語文献<sup>27</sup>を中心とした比較文献学的研究である<sup>28</sup>。ワット・マハータート所蔵貝葉写本は、例えば「パンニャーサジャータカ (Paññasajātaka)」<sup>29</sup>や「ワンサマーリニー (Vamsamālīnī)」<sup>30</sup> [APPENDIX B No. 115 写真4] 等、「タム文字写本文化圏」の他の地域における写本研究が進められている文献を複数含み、既に若干の研究者の注目を集めている。

そうした個々の写本についての研究と共に、写本文化自体に関する歴史的研究<sup>31</sup>への寄与も期待される。貝葉写本がしばしば人間と共に移動することに筆者はかねてより関心を抱いているが<sup>32</sup>、ワット・マハータート所蔵貝葉写本の場合、その転置の意味<sup>33</sup>は地域の政治的・文化的・社会的な歴史の文脈において探られねばならないだろう。転置された写本は後に新たな物語の創造を要請しながらも、新天地において確実に継承され、さらに新しい写本を加えて豊かになっていった。それらは今日タイ国の地方の文化遺産として遺されているが、歴史的コンテクストにおいては、より広域の「ラーオ写本」文化に属すべきものであろう。しかし現状では、調査や研究はラオスとタイそれぞれの国内において閉じてしまいがちである。「タム文字写本文化圏」を通じて言えるように、ここでも近現代国家の国境線を超えつつ、それを相対化する視角と実践が求められているのである。

[注]

- 1 飯島1998、同1999aを参照。カタログは、Social Research Institute, Chiang Mai University. 1986, do. 1991。
- 2 タム文字についての概説は、飯島2001b。
- 3 「タム文字写本文化圏」概念については、飯島1998:110-113を参照。
- 4 Peltier. 1987、加藤2001、等。
- 5 Laos, Sathaban Khonkhwa Silapa-Wannakhadi Haeng Sat. 1989.
- 6 Hundius. 2004。「ラーオ写本保存プログラム」の終了を期に、2004年1月8日～10日、ウィエンチャンにおいて、“The Literary Heritage of Laos: Preservation, Dissemination, and Research Perspectives”と題した国際会議が開催された。会議は1988年の全国セミナー以来15年間の成果と今後の課題を問い、活動の継続を保障することを目的に開かれたが、特にラオスの若い世代に如何にして豊かなラオス文学遺産を生きのまま伝え、その内容を知らしめ尊重させるか、同時に如何にして国際的な関心を醸成するか、という具体的目標が掲げられ、そのために貝葉写本を利用した今後の研究活動の様々な可能性が提示された [Kongdeuane, Dara, Hundius, Organizing Comminee. 2004]。会議の最終日に、筆者を含む会議参加者たちはウィエンチャン市パークグム郡ナーソーン村へ赴き、同村寺院に設けられた写本保存センターの開所式に立ち会った。
- 7 Grabowsky. 1995、林2000、同2003、飯島1996を参照。
- 8 報告書は、Sun Watthanatham Cangwat Mahasarakham. 1986。
- 9 この調査に関して、「東北タイ (ヤソートン) における貝葉文書調査とそれに基づく歴史的研

- 究」という活動題目で、平成8年度及び9年度の大和銀行アジア・オセアニア財団国際交流活動研究助成を受けた。
- 10 ラーンサーン王国の概略は、飯島 1999c:153-156。
  - 11 Evans. 2002: 30.
  - 12 飯島 1996:22-23、飯島 1999c:347-348を参照。
  - 13 Grabowsky. 1995: 122.
  - 14 「ヤソートーン年代記」は、1897年頃、バンコク朝5世王チュラーロンコーンによって任命された地方官たちの手により編纂されたと考えられる [PMS: 62]。1890年に最後のヤソートーン国主（Suphrom）が死亡した後、国主の任命は行われず、ヤソートーンはバンコク政府が進める中央集権的な地方統治体制に段階的に組み込まれていった。1897年には、Luang Siworarat (Thao Khae) がPhra Sunthonratchadetとして、ヤソートン知事（Phu-wa Ratchakan Muang Yasothon）に任じられている [SWTPI: Vol. 8, 2880; Vol. 11, 3724-5]。
  - 15 飯島 2001c、126頁註4を参照。一人の人物とする説と二人説とがあるが、ここでは「ヤソートーン年代記」の記述に従って、二人の人物として扱う。
  - 16 SWTPI: Vol. 11, 3720-1は、仏暦2357（1814）年としている。
  - 17 現代ラオスの「正史」（飯島 2003aを参照）は、スィアンケーオの乱を封建勢力に対するラーオ民衆の闘争として評価する。一方、鎮圧した側のプラター・プラウォー一族は狭量で利己的でラーオ民族全体の利益を顧みず、侵略者シャムに忠実たらんとしたと批判される。一族の祖（「正史」はパウオラビターという一人の人物としている）は、シャム軍を導き入れてラーンサーン王国の独立を失わしめた「民族の裏切り者（phu kabot sat）」の烙印を押されている。Pawatsat Lao. 2000: 358-363を参照。
  - 18 アヌ王の異母弟で、ラーオ軍中、王に次ぐ地位にあった [Mayoury & Pheuipanh. 1998: 159-160, 175-176]。
  - 19 第1代（Singh）:1814-23、第2代（Thao Sichai）:1823、第3代（Fai）:1823-57、第4代（Thao Men）:1857-73、第5代（Suphrom）:1873-95。SWTPI: Vol. 11, 3720-5に拠る。
  - 20 Bamphen na Ubon. n.d.
  - 21 Chumphae. 2000: 2-3.
  - 22 Bamphen na Ubon. n.d.
  - 23 SWTPI: Vol. 11, 3504.
  - 24 コロフォンの内容（書写の目的、状況、祈願文、写字生の名前などが含まれる）については、タイ北部のパーリ語貝葉写本のコロフォンを紹介したHundius. 1990を参照。
  - 25 書写年代が記されている場合、二種の方法が用いられている。第一は、小暦（Cunla-sakkalat CS.と略記）ないし仏暦（Phuttha-sakkalat PS.と略記）による年次である。第二は、ラーオ地域で用いられた60年周期（10種と12種の名称の組み合わせから成る）の年名ないしシャム式の十二支の年である。二種が併用されている場合も、一種だけの場合もある。併用されている場合、周期年の方が写字生の誤記の可能性が少ないと見て、周期年を基準に暦年をチェックした。但し、周期年に誤りが少ないとする判断には疑問の余地がある。年代を記録することに関する人々の意識といったより根源的な問題から、さらに検討すべき事柄であろう。



- 26 Surasak. 2002: 253.
- 27 タイ国各地方に伝わるパーリ語文献については、Hinüber. 1983、Bali. 2001、Skilling. 2002を参照。
- 28 文献学的研究の方法や展望については、Hundius. 2004を参照。
- 29 吉元2001を参照。
- 30 Bali. 1991を参照。
- 31 北タイの貝葉写本文化に関する最近の研究として、Veidlinger. 2002がある。
- 32 飯島1999b:138-139を参照。
- 33 ラオスにおいては、タイ国内に在る「ラーオ写本」について、タイ（シャム）人に略奪されたとする言説がしばしば語られる。

【参考文献】

- Bali Phuttharaksa. 1991. “Vamsamālinī A Critical Study of Palmleaf Texts”, Ph.D. Thesis, Banaras Hindu University.
- . 2001. (ed.) *Wannakam Bali nai Lanna: Raichoe Ekasan Tua Khian 89 Chabap Prakop Sara Sangkhep* [ラーンナーのパーリ語文献：写本89点の概要を含む目録], Chiang Mai: Social Research Institute, Chiang Mai University.
- Bamphen na Ubon. 1999. “Mahathat(Yasothon), Wat: Ho Trai [マハータート寺（ヤソートーン）：三蔵庫],” *SWTPI*, Vol. 10, pp. 3504-3511.
- . n.d. “Kan Phrasatsana Cangwat Yasothon [ヤソートーン県の仏教],” Yasothon (?).
- Chumphae Sripanya. 2000. “Traditional Rituals Concerning Phra That Phra Anon in Amphoe Muang, Yasothon Province [タイ語],” M.A. Thesis, Mahasarakham University.
- Evans, Grant. 2002. *A Short History of Laos: The Land In Between*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- 林行夫2000. 『ラオ人社会の宗教と文化変容—東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会.
- . 2003. 「東北タイとラオス」、ラオス文化研究所編2003、521-548頁.
- Grabowsky, Volker. 1995. “The Isan up to Its Integration into the Siamese State,” Volker Grabowsky ed., *Regions and National Integration in Thailand 1892-1992*, Wiesbaden: Harrasowitz Verlag.
- Hinüber, Oscar von. 1983. “Pali Manuscripts of Canonical Texts from North Thailand - A Preliminary Report,” *Journal of the Siam Society*, Vol. 71, pp. 75-88.
- Hundius, Harald. 1990. “The Colophons of Thirty Pali Manuscripts from Northern Thailand,” *Journal of the Pali Text Society*, XIV, pp. 1-173.
- . 2004. “Lao Manuscripts and Traditional Literature - The Struggle for Their Survival,” Paper presented at International Conference: The Literary Heritage of Laos, Vientiane, 08-10 January 2004.
- 飯島明子1996. 『『前近代ラオス』の歴史とは何だろうか?』、石井米雄・綾部恒雄編『もっと知りたいラオス』弘文堂、10-26頁.
- . 1998. 「ラーンナーの歴史と文献に関するノートーチェンマイの誕生をめぐって—」、新谷忠彦編1998、104-146頁.

- . 1999a. 「『タムナーン』論議を超えて—『北タイ』貝葉文書の紹介として—」, 『歴史評論』, No. 585, 11-28 頁.
- . 1999b. 「『国民国家』の狭間—ラオス・サイニャブリー県のニュアン人の村から」, 『アジア遊学』, 第9号, 123-148 頁.
- . 1999c. 「北方タイ人諸王国」・「植民地下のラオス」, 石井米雄・桜井由躬雄編『東南アジア史 I 大陸部』（新版世界各国史5）山川出版社, 133-156 頁・347-363 頁.
- . 2001a. 「タム文字」, 河野六郎・千野栄一・西田龍雄編『言語学大辞典 別巻世界文字辞典』三省堂, 588-592 頁.
- . 2001b. 「ラーオ語年代記の『世界』—『ウィエンチャン年代記略述本』の紹介として」, 桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史第4巻 東南アジア近世国家群の展開』岩波書店, 111-131 頁.
- . 2003. 「『正史』による前近代の歴史」, ラオス文化研究所編2003, 125-147 頁.
- 加藤久美子編 2001. 『中国・ラオス・タイにおけるタイ・ルー族史料の研究』（平成11年度～平成12年度科学研究費補助金・基盤研究（A）（2）研究成果報告書）.
- Kongdeuane Nettavong, Dara Kanlaya, Harald Hundius, Organizing Committee. 2004. “Preface,” *Abstracts (The Literary Heritage of Laos: Preservation, Dissemination, Research Perspectives)*, Vientiane.
- Laos, Sathaban Khonkhwa Silapa-Wannakhadi Haeng Sat. 1989. *Sammana Bailan Thua Pathet Khang-thi 1: Wanthi 10-13 Mina 1988* [第一回全国貝葉文書セミナー（1988年3月10-13日）], Vientiane.
- ラオス文化研究所編 2003. 『ラオス概説』めこん.
- Mayoury Ngaosyvathn & Pheuiphanh Ngaosyvathn. 1998. *Paths to Conflagration: Fifty Years of Diplomacy and Warfare in Laos, Thailand, and Vietnam, 1778-1828*, Ithaca: Cornell Southeast Asia Program Publications.
- Pawatsat Lao (Dukdamban-Pacuban). 2000. Vientiane: Kasuang Thalaeng-Khao lae Watthanatham.
- Peltier, Anatole-Roger. 1987. *La Littérature Tai Khoeun*, École Française d’Extrême-Orient & Social Research Institute, Chiang Mai University, Bangkok: Editions Duang Kamol.
- “Phongsawadan Muang Yasothon” [ヤソートーン年代記] [PMSと略記する]. 1969 [c.1897]. *Prachum Phong-sawadan* [史料集成], Vol. 44(Phak thi 70 ed. by Krom Sinlapakon, 1941), pp. 63-90, Bangkok: Khrusapha.
- Saranukrom Watthanatham Thai Phak Isan. [タイ文化百科事典イサーン編] [SWTPIと略記する]. 1999. 15 vols, Bangkok.
- 新谷忠彦編 1998. 『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社.
- Skilling, Peter and Santi Pakdeekham. 2002. *Pali Literature Transmitted in Central Siam (Materials for the Study of the Tripitaka Volume 1)*, Bangkok: Fragile Palm Leaves Foundation・Lumbini International Research Institute.
- Social Research Institute, Chiang Mai University. 1986. *Lan Na Literature: Catalogue of 954 Secular Titles among the 3,700 Palm-Leaf Manuscripts at the Social Research Institute of Chiang Mai University*, First Edition, Bangkok: Chulalongkorn University Bookstore.
- . 1991. *Catalogue of Palm-Leaf Texts on Microfilm at the Social Research Institute, Chiang Mai University 1978-1990*, Chiang Mai.
- Sun Watthanatham Cangwat Mahasarakham, Witthayalai Khru Mahasarakham. 1986. *Rai-ngan Phon Kan Prachum Sammana Khana Kammakan Khrongkan Samruat Ekasan Boran nai Phak Tawan-ok-chiang-nua*,

- 12-13 *Tulakhom* 2528 [東北地方古文書調査プロジェクト委員会セミナー（1985年10月12-13日）報告書, n.p. [Mahasarakham]
- Surasak Sisamang. 2002. *Lamdap Kasat Lao*, Bangkok: Krom Sinlapakon.
- Veidlinger, Daniel Marc. 2002. “Spreading the Dhamma: The Written Word and the Transmission of Pali Texts in Pre-modern Northern Thailand,” Ph.D. Dissertation, The University of Chicago.
- 吉元信行編 2001.『大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本における Paññāsajātaka の文献的研究』（平成10年度～平成12年度科学研究費補助金・基盤研究（B）（2）研究成果報告書）.

## APPENDIX A : Sponsors

1	Somdet Thewarat	I -2	936	1574
2-1	Upalapannya, Cao Somdet	I -5	CS. -176	1814
2-2	Upalapannya, Cao Somdet	I -30	CS. -171	1809
2-3	Upalapannya, Sangkharasa	I -136	-177	1815
2-4	Upalapannya, Cao Somdet	II -6	CS. -170	1808
2-5	Upalapannya, Somdet	II -9	CS. -173	1811
2-6	Upalapannya, Sangkharasa	II -10	CS. -184	1822
2-7	Upalapannya, Cao Somdet	II -69	CS. -170	1808
2-8	Upalapannya, Huacao	II -75	CS. -166	1804
2-9	Upalapannya, Sangkharasa	III -3	CS. -177	1815
2-10	Upalapannya, Ratsakhru	III -102	CS. -185	1823
2-11	Upalapannya, Ratsakhru	III -103	CS. -185	1823
2-12	Upalapannya, Ratsakhru	III -104	CS. -185	1823
2-13	Upalapannya, Somdet Sangkharasa	III -129	CS. -177	1815
2-14	Upalapannya, Ratsakhru Cao	III -156	CS. -186	1824
2-15	Upalapannya, Cao Somdet	IV -40	CS. -184	1822
2-16	Upalapannya, Cao Somdet	IV -44	CS. -184	1822
3	Cao Hona	I -6	CS. -128	1766
4	Phraya Muang Song	I -8	-164	1802
5	Cao Suphromthi Upahat	I -13	PS. 2419(?)	1876(?)
6	Somdet Sutthiwongsa Pannya	I -14	CS. -216	1854
7	Cao Khanan Thammacinda	I -15	CS. -157	1795
8	Luang Caw Muang Yasothon lae Pharyna	I -20	1210	1848
9-1	Phrasunthonrasathipati Phuminthonthirat, Somdet Phraborombophit	I -22	CS. -140	1778
9-2	Phrasunthonrasathipati Phuminthonthirat, Somdet Borombophit	II -55	CS. 1209, Mamae	1847
9-3	Phraunthonrasathipti Phuminthonthirat, Somdet	III -87	1209, Mamae	1847
10	Kwan Caowkromsomnai lae Phryna	I -25	-177	1815
11-1	Phrasunthonratsawongsa Mahakhatinya	I -28	CS. -129	1767
11-2	Phrasunthonratsawongsa Mahakhatinya	I -29	CS. 1209	1847
11-3	Phrasunthonratsawongsa Mahakhatinya, Phramahabophit	I -84	CS. 1208, Mamiya	1846
11-4	Phrasunthonratsawongsa, Cao	I -115	CS. 1208, Mamiya	1846
11-5	Phrasunthonratsawongsa	I -116	CS. 1247, Raka	1885
11-6	Phrasunthonratsawongsa	I -133	CS. 1208, Mamiya	1846
11-7	Phrasunthonratsawongsa	I -139	1203	1841
11-8	Phrasunthonratsawongsa, Phramahabophit	I -141	CS. 1208, Mamiya	1846
11-9	Phrasunthonratsawongsa	I -142	CS. 1208, Mamiya	1846
11-10	Phrasunthonratsawongsa	I -149	CS. 1209, Mamae	1847
11-11	Phrasunthonratsawongsa	II -8	CS. 1280	1918
11-12	Phrasunthonratsawongsa, Phramahabophit	II -22	CS. -209, Mamae	1847
11-13	Phrasunthonratsawongsa, Phramahabophit	II -113	CS. 1208, Mamiya	1846
11-14	Phrasunthonratsawongsa	II -114	CS. 1248, Co	1886
11-15	Phrasunthonratsawongsa	III -1	CS. 1208	1846
11-16	Phrasunthonratsawongsa	III -27	CS. 1208, Mamiya	1846
11-17	Phrasunthonratsawongsa, Somdet	III -47	1209	1847
11-18	Phrasunthonratsawongsa, Somdet	III -58	CS. 1209, Mamae	1847

11-19	Phrasunthonratsawongsa, Somdet	III -59	CS. 1209, Mamae	<u>1847</u>
11-20	Phrasunthonratsawongsa	III -65	CS. 1208, Mamiya	<u>1846</u>
11-21	Phrasunthonratsawongsa, Phramahabophit	III -110	CS. 1208, Mamiya	<u>1846</u>
11-22	Phrasunthonratsawongsa Rasathipadi Phumithonraatsacao, Somdet Borombo-phit	III -147	CS. 1208, Mamae	<u>1847</u>
11-23	Phrasunthonratsawongsa	III -160	CS. 1209, Mamae	<u>1847</u>
11-24	Phrasunthonratsawongsa, Somdet	IV -23	CS. 1209, Mamae	<u>1847</u>
11-25	Phrasunthonratsawongsa, Somdet	IV -26	1208	<u>1846</u>
11-26	Phrasunthonratsawongsa	IV -35	1208, Mamiya	<u>1846</u>
11-27	Phrasunthonratsawongsa, Phraborombo-phit	IV -86	CS. 1209	<u>1847</u>
11-28	Yotsothonratsawongsa, Phramahabophit Sathit Yu	IV -91	CS. 1208, Mamiya	<u>1846</u>
11-29	Phrasunthonratsawongsa	IV -109	CS. 1207	<u>1845</u>
11-30	Phrasunthonratsawongsa	IV -110	CS. 1207	<u>1845</u>
12-1	Mae Thum, Phi Nong, Luk Tao	I -35	PS. 2211(?)	<u>1668(?)</u>
12-2	Mae Thum, Phi Nong, Luk Tao	I -36	PS. 2211(?)	<u>1668(?)</u>
12-3	Mae Thum	I -47	PS. 2211(?)	<u>1668(?)</u>
13	Hua Cao Phiya	I -39	CS. 1248	<u>1886</u>
14	Somdet Phramahasangkharat Sattham-makanlanya	I -49	-130	<u>1768</u>
15	Thao Um kap Mía	I -56	-161	<u>1799</u>
16	Cao Kaosikanlanya kap Manda	I -59	1120	<u>1758</u>
17	Cao Sithamma	I -66	1161	<u>1799</u>
18	Rasakhammaphosok lae Pharinya	I -68	CS. -180	<u>1818</u>
19	Somdet La	I -69	CS. -115	<u>1753</u>
20	Mahasangkharasa Satthambanlaphit	I -81	CS. 976	<u>1614</u>
21-1	Sihatanurasathipati Phuminthonthirat, Somdet Boromphit	I -85	CS. -173	<u>1811</u>
21-2	Sihatanurasa, Somdet Borombophit	I -104	CS. -167	<u>1805</u>
21-3	Sihatanurasathipati Phuminthonthirat, Somdet Borombophit	II -106	-171	<u>1809</u>
21-4	Sihatanurasathipati Phuminthonthirat, Somdet Borombophit	III -7	-166	<u>1804</u>
21-5	Sihatanurasawipati Phuminthonthiratsa-ca, Somdet Borombophit	III -111	-188	<u>1826</u>
21-6	Sihatanurasathipati Phumintharathirat, Somdet Borombophit	III -127	-176	<u>1814</u>
21-7	Sihatanurasathipati, Somdet Borombophit	IV -20	1170	<u>1808</u>
21-8	Sihatanura(sa)thipati, Somdet Borombo-phit	IV -21	1171	<u>1809</u>
21-9	Sihatanurasathipati Phuminthonthirat, Somdet Borombophit	IV -50	-166	<u>1804</u>
21-10	Siihatanurasathirat, Somdet Borombophit	IV -96	-166	<u>1804</u>
21-11	Sihatun[sic.]rasathip Phuminthonthirat	IV -108	-166	<u>1804</u>
22	Huanyai Khampha	I -87	CS. 1179	<u>1817</u>
23-1	Wongsa Sena, Pho Ok	I -91	CS. 1212	<u>1850</u>
23-2	Wongsa Sena kap thang Pharinya Luk Tao	II -120	CS. -213, Kun	<u>1851</u>
23-3	Wongsa Sena	III -16	CS. -214	<u>1852</u>
23-4	Wongsa Sena kap thang Pharinya Luk Tao	IV -82	CS. -214	<u>1852</u>
24	Pho Cuanut kap Pharinya	I -95	-105	<u>1743</u>
25	Cao Khanan Kunlawongsa	I -96	CS. -1159(?)	<u>1797(?)</u>
26-1	Phraphothisan Rasathiratcao, Somdet	I -98	CS. -988(?)	<u>1626(?)</u>



タイ国ヤソートーン県ワット・マハータート所蔵貝葉写本について（飯島明子）

26-2	Phraphothisan Rasathiratcao, Somdet Borombophit	I -135	-985	1623
27	Pho Khamtoen kap Pharinya	I -101	CS. -164	1802
28	Pho Ok Palatkaeo kap Pnarinya	I -103	CS. -141	1779
29-1	Somdet Ratsakhru Sisumang(khala)	I -105	CS. -167	1805
29-2	Somdet Ratsakhru Sisumang(khala)	I -112	-169	1807
29-3	Somdet Ratsakhru Sisumang(khala)	III -81	-169	1807
30	Somdet Borombophit Sisahaphan-tarasathipati	I -107	-175	1813
31	Cao Baocitcetcikhana	I -109	-121	1759
32-1	Cao Muang Yotsothon Lakhonphanom	I -114	-289(?)	1927(?)
32-2	Cao Muang Yasothon Lakhonphanom kap thang Pharinya Butra	II -51	CS. 1207 (?), Maseng	1845(?)
32-3	Cao Muang Yasothon Lakhonphanom lae But Phanranya	II -73	CS. 1289	1927
32-4	Cao Muang Yasothon Lakhonphanom, Somdet	III -71	-188	1826
32-5	Cao Yotsunthon Lakhonphanom, Somdet	III -105	-188	1826
32-6	Cao Muang Sisunthon Lakhonphanom	III -107	CS. 1208	1846
32-7	Cao Muang Yotsothon Lakhonphanom	IV -71	CS. 1207	1845
32-8	Cao Muang Yasothon Lakhonphanom	IV -77	CS. -208	1846
33	Cao Somdet But	I -125	-169	1807
34	Nen Thumma	I -130	-211	1849
35	Caohua Sasi	I -132	CS. -169	1807
36	Mahacan	I -134	-980	1618
37	Caonyangkhamomluang Muang Yasothon	I -140	CS. 1248	1886
38-1	Atcanya Khuluang Lakkham	I -146	CS. 1235	1873
38-2	Nyakhru Lakkham	II -71	CS. 1247	1885
39	Phrakhanan Hottao Sahamata	II -3	CS. 1137	1775
40	Sainyawongsa Sena	II -4	1214, Chuat	1852
41	Moennong Sanglo	II -11	CS. 960	1598
42	Phanya Song Muang kap thang Parinya But Cao Satip Koi pen Prasan Phainai	II -14	-164	1802
43	Mahaphuthakhosacan Wonsasi	II -16	995	1633
44	Phramahaphumminthara Thammikarasa	II -17	CS. 1151	1789
45	Saemsom kap thang Pharinya But	II -19	CS. -180	1818
46	Cao Pathum lae Luk Tao Miya	II -20	CS. -215, Salu	1853
47-1	Luang Thera	II -36	PS. 2389	1846
47-2	Luang Thera	II -37	PS. 2389	1846
48	Somdet Cantha	II -45	2413	1870
49	Mae Hok	II -48	CS. 1250, Chuat	1888
50	Nang Mo Bannaphakhang	II -53	CS. -144	1782
51	Cao Somdet Sinabut	II -70	-127	1765
52	Cao Mi	II -79	CS. 985	1623
53	Sangkharasa Suthamwongsa kap thang Mada lae Phi Nong	II -81	CS. -170	1808
54	Mahakhanan Caopaklang	II -87	CS. 981	1619
55-1	Mahasomdet Awakkharawon Ratsakhru Phithilancao Wat Sibunhuang Comphet	II -89	CS. -113	1751
55-2	Akkharawon Ratsakhru, Mahasomdet	III -158	CS. -113	1751
56	Phramahatham Cao	II -91	CS. 992	1630
57	Caokhanan In	II -94	PS. 2396, Salu	1853
58	Cao Han yu Ban Koen Sang Cedi Kwanbun Nang Bo	II -95	CS. 931	1569

59	Uai Maharatsacao Phraratsa Manda Nang Saenyat Somdet Ratsamuli pen Ongkham Phainai	II -96	CS. 973	1611
60	Somdet Phraboromthammikarat Sang nai okat prapadaphisek ni Krung Rat(na)-kosin	II -97	PS. 2324	1781
61	Phranya Sieng Nuea	II -101	CS. -176	<u>1814</u>
62	Ratsakhru Kham Cao Khankham	II -103	CS. -183	<u>1821</u>
63	Sasuphrompannya	II -116	CS. -178	<u>1816</u>
64	Somdet Phrapencao Song Muang Yotsothon	II -121	1209, Mamae	<u>1847</u>
65	Khanan Mo Suwanno	II -126	CS. -129, Salu	<u>1817</u>
66	Pho Ok Suwanno Luk Tao Cao Sano Nang Kao Noi	II -127	CS. -167	1805
67-1	Nang Khaolun	III -10	-184	1822
67-2	Nang Khaolun	III -12	-185	<u>1823</u>
68	Caonai Yot	III -18	CS. -126	<u>1764</u>
69	Moen Anya	III -28	968	<u>1606</u>
70	Phrasattharat Somdet Borombophit Mahakasat Katinya Thammikarasathirat	III -29	CS. -147	<u>1785</u>
71	Maecao Sasuk	III -31	CS. 1185	<u>1823</u>
72-1	Uai Phanyacao	III -35	CS. 981	<u>1619</u>
72-2	Uai Phanyacao	III -36	CS. 981	1619
73	Phraratsakhru Haisok	III -38	-187	<u>1825</u>
74	Caokhanan Phrom	III -39	CS. 1176	<u>1814</u>
75	Acan Kluai	III -40	-184	<u>1822</u>
76	Canthorasat Phuamia lae Luk Tao	III -67	CS. -155	<u>1793</u>
77	Luang Cao Muang Yasothon	III -70	1210, Wok	<u>1848</u>
78-1	Huacao Prasit	III -77	CS. 1186	<u>1824</u>
78-2	Huacao Prasit	III -78	CS. 1186	<u>1824</u>
79-1	Cao Phrasunthonratsawongsa Maha Khatinya Thammikarasathirat	III -79	CS. -110	1748
79-2	Cao Phrasunthonratsawongsa Maha Khatinya Thammikarasathirat	III -80	CS. -110	1748
80	Khanan Sisumangkhal Pannya	III -82	CS. -141	1779
81	Cao Somdet Ratanapannya Sahapita Mata Phakhini	III -83	CS. 1177	<u>1815</u>
82	Mae Ok Nang Tu	III -89	CS. 1233	<u>1871</u>
83	Sao Kluai kap Thao Hot Phua-mia	III -91	CS. -126	1764
84	Cao Phrom Phikkhu	III -92	CS. 955	1593
85	Mom Budda	III -95	CS. -173	<u>1811</u>
86	Cua Khao Tabun	III -98	CS. 966	1604
87	Nong Somdet Borombophit Rasathiratcao Ton sue wa Ommarat	III -117	-127	<u>1765</u>
88	Caonai Waen kap thang Thit Natta	III -119	-165	<u>1803</u>
89-1	Cao Khanan Suwannason	III -121	CS. -136	1774
89-2	Cao Khanan Suwannason	III -122	CS. -137	1775
89-3	Cao Khanan Suwannason	III -123	CS. -137	1775
90	Cao Khanan Sangkhasanya Khot-tuangsa	III -125	CS. -164	<u>1802</u>
91	Phonsiri Bunsanyato	III -126	970	<u>1608</u>
92	Ta Nam Phuamia Luk Tao Lan Laen	III -132	CS. -188	<u>1826</u>
93-1	Patsa, Mom	III -133	CS. -171	<u>1809</u>
93-2	Patsa, Caohua	III -161	2361	1818
94	Ta Phuk kap Parinya But Natda	III -136	CS.-184	<u>1822</u>

95	Huacao Sanon	III -146	-173	1811
96	Moen Suea kap thang Pharinya But Natda	III -148	988	1626
97	Huacao Soi	III -154	CS. -187	1825
98	Cao Somdet Thammalokda kap Ok-phanthum Luk Mia	III -155	CS. -177	1815
99	Cua Khao Tangson	III -159	CS. 975	1613
100	Mae Cao Phumapara Muang Yotsunthon	IV -2	CS. 1209, Mamae	1847
101	Sainyawongsa Sena kap Parinya	IV -6	CS. -213	1851
102	Phranya Luang Can	IV -8	CS. -153	1791
103	Pho Ok Phrasi	IV -9	CS. 1242	1880
104	Nang Phinyamun kap Phua Luk	IV -10	CS. -123	1761
105	Cao Khanan Thipwongsa	IV -14	2340	1797
106	Cao Somdet Phrom	IV -33	CS. -185	1823
107	Cao Sumon kap Saencan lae Saensilawat	IV -36	CS. -123	1761
108	Somdet Phrasainyasetthathipati Surinyawong Phuminthonthirat	IV -37	1163	1802
109	Maha Ratsakhru Mathurama	IV -41	-173	1811
110	Cao Khanan Kluai	IV -61	-159	1797
111	Cao Hua Phaengmat	IV -62	-168	1806
112	Cao Khanan Kannya	IV -68	-162	1800
113	Cao Khampu kap But	IV -69	1189	1827
114	Ok Khao Phok	IV -81	979	1617
115	Phraratsa-manda Caofa	IV -83	(PS.?)2365	1822
116	Khun Somdet Phan	IV -84	CS. 1250	1888
117	Pho Man Phua-mia	IV -87	1182	1820
118	Cao Hua Candi	IV -90	CS. 1211	1849
119	Moen Nyinya kap Cao Somdet Pannya	IV -92	-169	1807
120	Cao Hua Phumi	IV -95	CS. 1233, Mamae	1871
121	Pho Ok Hua Cao Sukha Mae Ok Sat	IV -97	-182	1820
122	Cua Ubon	IV -98	CS. -163	1801
123	Nai Pha	IV -101	CS. -173	1811
124	Cao Sangkharasa Khotamapannya	IV -106	1171	1809
125	Cao Nyangkhamom Muang Yasothon	IV -107	CS. 1209	1847
126	Cua Kham	IV -113	CS. -163	1801

## APPENDIX B

1. NISSAYA-ABHIDHĀNAŚABDA
2. NISSAYA-NIYĀSSA
3. ŚABDA-VINAYAKICCA
4. ŚABDA-NĀMA
5. SAMANTAPĀSĀDIKĀ
6. VISUDDHIMAGGA
7. URAṄGADHĀTU
8. NISSAYA-DHAMMAPADA
9. NISSAYA- SAMANTAPĀSĀDIKĀ
10. ŚABDA-NĀMA
11. NĀMA-ŚABDA
12. NISSAYA-DHAMMAPADA
13. ABHIDHAMMATTHASAṄGAHA
14. PĀLI-SADDĀ
15. ŚABDA-PĀLI-MŪLAKACCĀYANA
16. ABHIDHAMMA CHET KHAMPHI
17. PAṬHAMASAMBODHI
18. YAMAKAPAKARAṆA
19. ŚABDA-SAMMOHAVINODANĪ
20. NISSAYA-DHAMMAPADA
21. THAMNANKHUNBOROM
22. SAMANTAPĀSĀDIKĀ
23. PĀLI-PARĀJIKAKAṆḌA
24. SAṄGAHAVATTHU
25. PHRAWETSANDONCHADOK (PHRA-  
VESSANTARAJĀTAKA)
26. PORĀṆAṬĪKĀ-ABHIDHAMMATTHASAṄ  
GAHA
27. SUBRAMMOKKHĀJĀTAKA
28. PĀLI-VĪSATINIPĀTA
29. CŪḶANIDDESA
30. PĀLI-PĀCITTĪYA
31. KAE-GOVINDASUTTA
32. SAMBHOJAṄGASUTTA
33. ĀKĀRAVATTASUTTA
34. CANDASUKĀRISUTTA
35. CHALONGPIDOK
36. PANYABARAMI (PAÑÑĀPARAMĪ)
37. SAKKAPAṆṆA (SAKKAPAÑHĀ?)
38. MŪLANIBBĀNA
39. SIKKHĀPADA
40. SADDASAṄGAHA
41. SIRIMAHĀMĀYĀ
42. PAṬHAMASAMBODHI
43. PAETMUENSIPHANPHRATHAMMAKHAN
44. SAMMOHAVINODANĪ
45. ŚABDA-NĀMA
46. DHAMMAPADA
47. UṆHISAVIJAYĀ
48. URAṄGADHĀTU
49. NISSAYA-ṬĪKĀDHAMMACAKKA
50. ĀKĀRĀVATTASUTTA
51. KUSARĀJA
52. PĀCITTĪYA
53. ṬĪKĀ-KAṆKHĀVITARANĪ
54. PAETMUENSIPHANPHRATHAMMAKHAN
55. NIBBĀNASUTTA
56. PĀLI-PARĀJIKAKAṆḌA
57. ŚABDA-NĀMA
58. URAṄGADHĀTU
59. PĀLI-SAMANTAPĀSĀDIKĀ
60. SIKKHĀPADAVINAYAVINICCHAYA
61. YOJANĀ-VATTHUPAKARAṆA
62. AṬṬHAKATHĀ-KATHĀVATTHUPAKARAṆA
63. ANUṬṬIKĀ-DHĀTU
64. ṬĪKĀ-KATHĀVATTHU
65. AṬṬHAKATHĀ-KATHĀVATTHUPAKARAṆA
66. SUVAṆṆASAṆKHA (?)
67. SANGHOMTHAT

- |                                   |                                      |
|-----------------------------------|--------------------------------------|
| 68. ŚABDA-SAMANTAPĀSĀDIKĀ         | 103. ŚABDA-MŪLAKACCĀYANA             |
| 69. JANASANDA (JANASANDHA?)       | 104. VISUDDHIMAGGA                   |
| 70. SUJAVANṆACAKKAKUMĀRA          | 105. NISSAYA-MŪLAPANṆĀSAKA MAJJHIMA- |
| 71. ŚABDA-SAMANTAPĀSĀDIKĀ         | NIKĀYA                               |
| 72. URAṆGADHĀTU                   | 106. ABHIDHAMMA CHET KHAMPHI         |
| 73. SAMANTAPĀSĀDIKĀ               | 107. DHAMMAPADA                      |
| 74. SANGHOMTHAT                   | 108. ṬIKĀ-VIBHAṆGAPAKARAṆA           |
| 75. ŚABDA-NĀMA                    | 109. ŚABDA-NIDĀNA                    |
| 76. MAṆGALADĪPANĪ                 | 110. UPPADESAPATṬHĀNA                |
| 77. DHAMMASAṆGAṆĪ                 | 111. SAMMOHAVINODANĪ                 |
| 78. SAMĀSANISSAYAKĀRAKA           | 112. SAMMOHAVINODANĪ                 |
| 79. NISSAYA-TADDHITA              | 113. VAJIRABODHI                     |
| 80. ŚABDA-MŪLAKACCĀYANA           | 114. PĀLI-SAMANTAPĀSĀDIKĀ            |
| 81. VESSANTARADĪPANĪ              | 115. VAṢSAMĀLINĪ                     |
| 82. SAMANTAPĀSĀDIKĀ               | 116. ŚABDA-ATTHASĀLINĪ               |
| 83. NISSAYA-THATSAKUNG            | 117. ATTHASĀLINĪ                     |
| 84. PHRACHAOHASIPCHAT             | 118. PĀLI-SAMANTAPĀSĀDIKĀ            |
| 85. PĀLI-PAṆṆĀSAJĀTAKA            | 119. GAṆṬHĪPĀṬIMOKKHA                |
| 86. PHRA-DHAMMAPADA               | 120. ATTHAKATHĀ-YAMAKAPAKARAṆA       |
| 87. ŚABDA-MŪLAKACCĀYANA           | 121. ATTHAKATHĀ-MAHĀPATṬHĀNA         |
| 88. EKANIPĀTA                     | 122. PĀLI-VUTTODAYA                  |
| 89. SAMANTAPĀSĀDIKĀ               | 123. KAṆKHĀVITARANĪ                  |
| 90. MĀLEYAVATTHUṬĪKĀDĪPANĪ        | 124. NĀMA-ŚABDA                      |
| 91. DIBBAMANTA                    | 125. ŚABDA-KĀRAKA                    |
| 92. SŪTTAMONKLANG                 | 126. VAJIRAṬĪKĀ-SAMANTAPĀSĀDIKĀ      |
| 93. ŚABDA-ABBHANTARA              | 127. TRAILOKAVINICCHAYA              |
| 94. NISSAYA-ABHIDHAMMATTHASAṆGAHA | 128. BALASAṆKHYĀ                     |
| 95. VOHĀRADESANĀ-AṬṬHANIPĀTA      | 129. VINAYASĀRATTHASAṆGAHA           |
| 96. ŚABDA-UṆṆĀ ( ŚABDA-UṆĀDI ?)   | 130. PAETMUENSIPHANPHRATHAMMAKHAN    |
| 97. GAṆṬHĪPĀṬIMOKKHA              | 131. CANDAGĀTA                       |
| 98. ṬIKĀ-SAṆKHEPAVANṆANĀ          | 132. SUBRAMMOKKHĀ                    |
| 99. VAJIRAṬĪKĀ-MAHĀVAGGA          | 133. EKANIPĀTA                       |
| 100. SANGHOMTHAT                  | 134. ATTHAKATHĀ-MAHĀVAGGA-DĪGHA-     |
| 101. DHAMMAPADA                   | NIKĀYA                               |
| 102. SAKKATI                      | 135. PĀLI-SAMANTAPĀSĀDIKĀ            |



- 136. ATTHAKATHĀ-MAHĀVAGGA
- 137. ATTHAKATHĀ-MAHĀVAGGA
- 138. PAṬHAMASAMBODHI
- 139. PĀLI-SAMUHADHAMMA
- 140. VINAYAKICCA
- 141. TĪṢSANIPĀTA
- 142. PAETMUENSIPHANPHRATHAMMAKHAN
- 143. ATTHAKATHĀ-PUGGALAPANÑATTI
- 144. BOJAṄGASUTTA
- 145. ŚABDA-SAMĀSA
- 146. PĀLI-PARĀJIKAKAṆḌA
- 147. DHAMMAPADA
- 148. PAETMUENSIPHANPHRATHAMMAKHAN
- 149. ŚABDA-ATTHAKATHA-VISĀLINĪ
- 150. NISSAYA-TADDHITA

[付記] パーリ語のローマナイゼーションについては、  
チャーンウィット・タットケーオ氏にご協力い  
ただいた。



〔写真1〕 池のなかに建つワット・マハータートの経庫（入り口側）

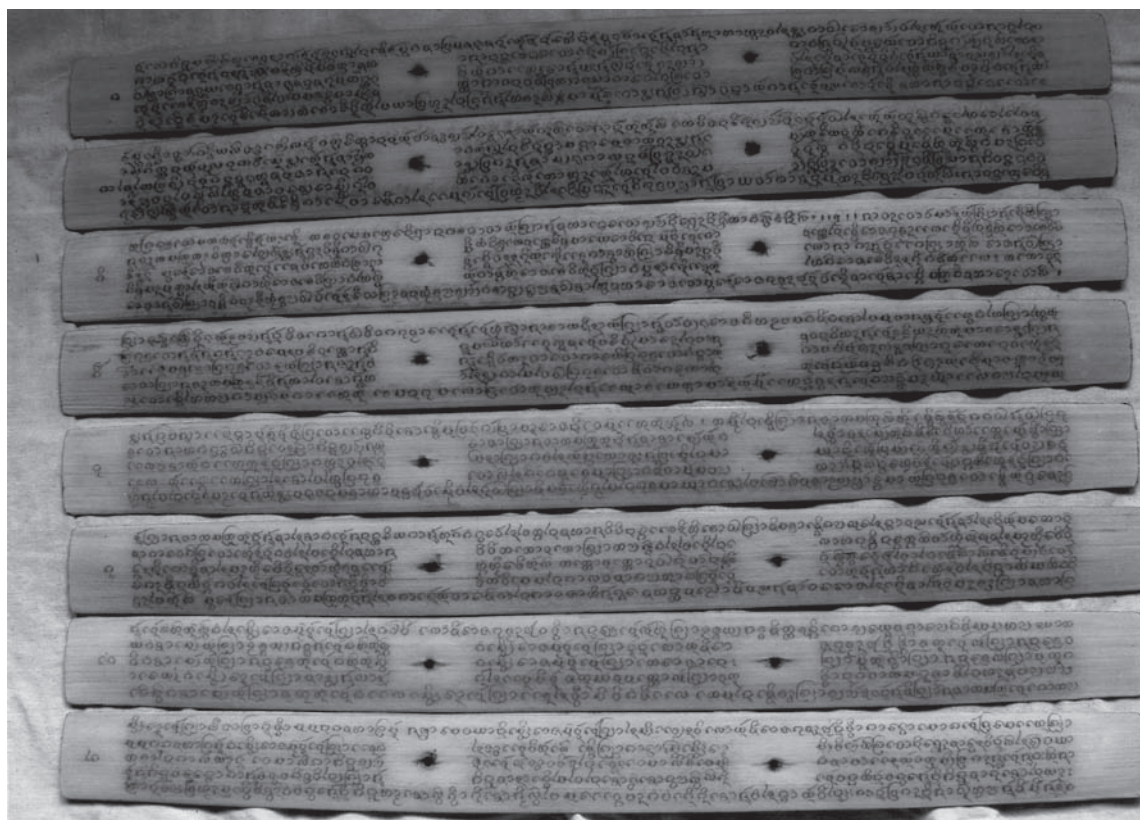


〔写真2〕 ワット・マハータートの経庫内の8段より成る棚



〔写真3〕 ワット・マハータートの経庫内の棚に置かれた貝葉





[写真4] Vamsamālīnīの貝葉写本の一部（ワット・マハータート経庫所蔵 I-115）